

本田財団レポート No.4

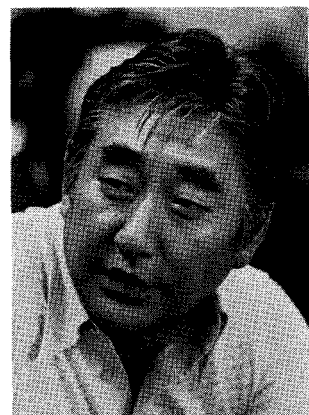
語り言葉としての日本語

劇団四季主宰 浅利 慶太

このレポートは昭和53年9月11日、国際文化会館において行なわれた第3回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです。

## はじめに

本田財団のメンバーのお顔ぶれを拝見しますと、私の仕事とは、違う方々が多くて、どんなお話をすればよいのかと考えました。我々の職業にはいろいろなテーマがございますけれども、皆様と我々が一番共有できる話題として、言葉の問題、これを中心に、普段なんでもなく使われている語彙というものを、我々のような専門家がいじると、どういう問題が出てくるか、あるいは言葉は、社会のシンボルでありますから、そこに社会の良さ悪さ、歪み、伝統、歴史がどのように反映しているかということをお話させていただきます。



## 語り方教育の不在

言葉というのは、御承知のように、書くこと、読むこと、語ることと三つの機能を持っております。日本の教育では、読むこと、書くことは教えますが、語ることは教えない。読み書き算盤という言葉はありますが、不思議なことに、語り方の教育というのを大変疎かにしています。しかも、今の若い人達は筆無精になっておりますから、ものを書かなくなって、手紙も書かない。けれども、言語の機能のほぼ95%が語ることに使われているにもかかわらず、語ることに對する正しい訓練が教育にはない。最近では語り言葉の乱れが非常に指摘され始めてはおりますが、「スキンシップ」という言葉がございますが、子供達が楽しく語れないものですから、何となく感じだけでお互いの意志を通わせようとする、非常に恐ろしいことだと思います。

ある大学の助教授が最近の学生について、きちんと語れる学生と、語れない学生とが、はっきり分かれていると話していました。語り方というのか、語り言葉を、学校で教育しないために、家庭の躰の問題になってしまい、家庭でしっかり躰けてある人達と、家庭がそういうことを子供達に對して疎かにした人達とぜんぜん別のグループになってしまうのです。その先生が仰るには、あたかも、そこに、一つの階級が存在するようである。学生でも語れる学生はあるグループを作り、語れない者達は語れないグループを作る。そのグループの間には、恋愛もなければ、交遊関係もない。

国立国語研究所というところがございまして、その言語行動研究部長という方、つまり、言語行動を専門に取扱っていらっしゃる先生と、語り言葉というものについてNHKで対談させていただいたことがございます。国語研究所では、漢字の書き方をどうするか、その字角をどうするか等については非常に熱心に研究されておりますが、語ることの法則性についてはなされて

いない。私が語り言葉に関する法則を見つけたように、むしろ我々演劇人がやっているという訳です。

## 語り言葉の特性と構造

ここで、その法則性についてお話しする前に、まず、日本語の語り言葉の特性と構造について考えたいと存じます。それについて、外国人が日本語をどのように見ているかを、例をあげてお話しいたします。

### ●日本語は世界で最も歌いやすい言語

私は日生劇場のプロデューサーをずっとやっておりまして、沢山の外国からのオペラやバレエ、劇団を招聘いたしました。ドイツのベルリンドイツオペラというオペラ団を呼びました時、世界有数の歌手達が来日いたしました。その中に、あのエリカ・ケイトというソプラノ歌手がおりました。年齢もいまでは50代ですが、ドイツのナイチンゲールといわれた代表的な歌手です。この方が、なかなか日本酒の好きな方で、いつも一杯飲みに行こうと誘われ、いろいろな話をしたものです。ある時、私が「日本ではオペラがうまくいかない、私自身が演出していてもうまくいかない。」という話をいたしました。例えば、モーツァルトの「魔笛」というオペラがございますが、三人のラーメが若いタミーノという男に別れを告げる所で、「アウフヴィーダーゼーエン、アウフヴィーダーゼーエン」というメロディーと言葉がある。「アウフヴィーダーゼーエン」というのは、「さようなら」という意味で、ドイツ語では、非常に美しく聞こえるのが、日本語だと「さよおなら、さよおなら」と、何とも無様なことになってしまう。これではどうもリアリティがない。日本語のオペラというのはどうもピンとこないと申しますと、彼女は、「それはおかしな話ですね。」と仰るのです。日本語というのは世界でも最も歌いやすい言語のはずで、それは、日本語には母音が多いせいであると言うのです。一番歌いやすいのはイタリア語で、ドイツ人であるにもかかわらず、モーツァルトは、イタリア語でオペラを書いている。ドイツ語はむしろ歌いにくい。ではなぜイタリア語が歌いやすいのかというと、母音の子音の一音一音の間に入っているということで、日本語も同様の理由で歌いやすいはずですよというのが彼女の意見でした。そして、さきほどの歌も、日本語で、柔くなめらかに、実にいい感じで歌ってくれました。

### ●母音に対して鈍感な日本人

後で考えましたら、母音のとり扱い方にあるのだと思いました。彼女に言わせると、母音の特性、重要性を日本人があまり認識していないのではとの事でした。

日本語には5つのア・イ・ウ・エ・オの母音がございます。これは文明国の言葉の中で一番母音の数が少ない。もちろん日本の標準語で比べているの

であって、東北弁など、もっとデリケートな半母音が沢山ございますし、讃岐弁とか出雲弁とかですと、それぞれやわらかい音の響きがあるわけです。けれども、標準語はどちらかというとな5つの母音だけで決ってしまう。この母音に対して日本人は鈍感だというのですね。

### ●日本語は人を敬うための言葉

また、彼女が言うには、世界で一番歌いやすい言葉はイタリア語で、ドイツ語は詩を作るための言葉、フランス語は愛を語るための、スペイン語は祈りを捧げるための、英語は商売の言葉だと言うのです。そして、日本語は人を敬うための言葉であると。もちろん彼女は日本語が出来ないのですが、それだけ、外国の言語に対して、的確な語感を持っている彼女が、日本語を人を敬うための言葉だと語ったことは、日本人として相当重大に考えなくては行けないと思いました。つまり、日本語は、人を敬うという、人間のコミュニケーションを非常に丁寧に取り扱っているということを前提にした言語構造を持つということです。それと同時に母音の重要性と大切さを日本人が甘く考え過ぎているということと、言語の持つ心を交流させるということの機能、それを美しく語るための構造の問題を彼女に指摘されたのだと思います。

## 明晰に語るには

さて、私も前々よりいろいろなことを考えておまして、例えば、劇場の空間で、台詞がよく聞こえる聞こえないという問題がございますが、台詞が聞こえるというのは、大声を出すからではないのです。人間の体では、まず肺に息を沢山いれて、除々にこれを送っていくと喉を通り、声帯というものを通って共鳴して音になって出ていくわけです。よく大声を上げると言いますが、大声を上げるというのはどういうことか、よく解らないわけです。声帯というのは、大体、小指の爪ぐらいのもので、それが2つついている。薄さも大体、桜の花びら位で、色もそうです。それが息が抜けていく時に振動する、その振動が伝わって音になっていく。もちろん喉のこの辺の筋肉の強さとか、腹背筋の強さというのが重要になってはきますけれど、声が抜けていく所は声帯なのです。声帯に無理をかけて喉をつぶしたという人がいますが、耳鼻咽喉科の医者に連れて行って覗いてみると、声帯の縁が、ほんの少しピンクになっている程度の充血なのです。声の高低にしても、通る場所の違いで、高音域、中音域、低音域と変化があるわけです。ただ声そのものの量という問題でなく、言語として何を言っているのかという明晰さとなると別の問題になります。大声でも不明晰な人がいる。なぜ不明晰なのか、声の量を出しながらなお明晰に語るにはどうすれば良いのか。これが、我々の職業的課題になってくるわけです。初めのうちは劇場が悪いせいだと思っていましたが、良い劇場が出来るうちに、どうやら、声の出し方に問題があると思ひ、研究をすることになりました。

## ●母音をきちんと切る

実は、小沢征爾と話をしていて、1つのヒントを得たのですが、彼が言うには、いいピアニストの弾く音は、ピアノの一音一音が、真珠のネックレスの真中の糸を抜いた時に、等間隔に玉がおかれるように聞こえる。それがプロピアニストの第一の条件だと。しかし、ピアノの音というのは音形的に言えば、三角ではないのかとたずねますと、「いや、それをあえて丸ととらえたい。それで、音が切れているのがいい」ということなのです。

それからヒントを得ますと、台詞も同様で一音一音が真珠の粒がおかれているように切れていれば、聞こえるはずだと、こういう風に発想したわけですね。では日本語の一音とは何か。例えば、私は慶太という名ですから、「ケ」というのが私の最初の音になるわけです。「ケ」というのはローマ字にしますと、KとEで表わされます。何となく私達は、母音半分、子音半分で「ケ」を成立させている様に思いがちですが、日本語の子音には音がないのです。「K」だけ発音しようとしても喉のところで止まってしまう。「E」を入れて初めて「ケ」という音になる。もっと極端に言えば、「マ」(MA)の音、「M」だけでしたら、口をとじているだけです。「ラ」(RA)もそうです。つまり日本語の音というのは子音には音がなく、母音にしか音がないというわけです。よく考えればあたり前の話ですが、何となく子音に音があると思ってしまう。もっともこれは、越路吹雪さんの御亭主の内藤法美氏と大論争になりました。彼は、子音にも音がある。たとえば「シュ」(SH)というのはどうだと言いだしたのです。「U」という母音がそこに入る、入らないで論争になりましたね。けれども、子音というのは、口の形であって母音が音そのものなのです。ですから、明晰に話すというのは母音をきちんと切れれば話せるというわけです。

## ●ア母音が明晰さへの鍵

「おはよう」と言う時に、母音の「オ、ア、オ、オ」これが切れてさえいけば、どんな空間でも音は抜けていく。これが、お正月に焼いたおもちをおひつに入れるとくっついてしまって、一つとり出すとみんなくっついてくる様なあいまいな音になると、非常に不明晰になる。そうしますと、私は今日40分間に5つの母音ばかり音にしているわけですね。もう少し変化はないのかと思うのですが、あきらかに5つの母音だけを使っています。それでなんとなくこの5つの母音を均等に使っている様な錯覚におちますが、実は、ア(A)の母音を多用しているのです。例えば私は浅利慶太ですから、ア(A)・サ(SA)・リ(RI)・ケ(KE)・イ(I)・タ(TA)と50%がア(A)母音できてます。この原則を発見した時の総理大臣が田中角栄で、またア(A)母音が多い。「あなたがたが、朝、博多から」という言葉は13個ア(A)母音が続きます。こんな異常な言語は世界にはなく、これも一つの日本語の強い特徴とも言えるでしょう。ですから、日本語を明晰に話そうとすれば、語中にあるア(A)母音を正確にする事です。

越路吹雪が今年で25周年のリサイタルを日生劇場でやっておりますが、何周年目かのリサイタルの時に、「越路吹雪の歌を20年間聞いてくださってありがとうございます。」という台詞があり、彼女が舞台上で挨拶をしたのです。ところが、彼女自分の名前をまちがえてしまった。「こしじふぶき」といえず、「こししふぶき」と。これは楽屋で話題になりましてね、自分の名前を間違える人間がいるだろうか、自分の名前がきちんと発音できないなんてと。諸説でました。たとえば、彼女を見て越路吹雪だとわからない日本人はいないだろう、だから自己紹介をしたことがないのだろうというのが、オーケストラのメンバーの説でした。私だけは違う意見でとても簡単なことなのです。それは越路吹雪という名前の中には、ア(A)母音がない。だから喋りにくいのですね。それだけの話で、彼女の名前が「こしだふぶき」か、「こしじはぶき」だったら喋れたはずだと思うのです。そのくらい、ア(A)母音というものが日本語を明晰にするための重要な要素になっているわけです。

### ●語り方の文法

この構造を経験からつきとめて、これをもとにもっと明晰に話すにはどうしたらいいかと考え、見出した法則がいくつかございます。たとえば、連母音というのがあり、「今日は雨だ。」という言葉で、「今日は」の最後の(WA)と、次の「雨だ」の頭(A)が連母音タイプ型になっています。その連母音はかならず口の中で共鳴変化をおこしている。同じア(A)の音でも、変化しないと「あしためだ」というように聞こえわかりにくい。ア(A)の連母音だけでなく、エ(E)の連母音、イ(I)の連母音それぞれ、すべて連母音の共鳴変化の原則と言っております。

加賀まりこにオンディーヌを演らせた時、最後の一番美しい台詞で、「私はあなたを愛するわ。永遠に。」というのがあり、映画の女優として基本訓練ができていない彼女は、この台詞を「エーエンに。」と言ってしまい、実にきたない。「永遠」というのも共鳴変化なので、エ(E)の同母音が共鳴変化をすればきれいにできる。ですから美しく語らせるにはこの変化をしっかり身につけさせることなのです。

また、連子音原則というのもございます。「いってくる(ITTEKURU)」、あるいは、「やってくる(YATTEKURU)」がそれで、最初の「T」がサイレントでありながら、無音の中の発音がおこなわれて、次のTに作用する。それを正確に発音しないと、急いで喋る時に、「いてくる(ITEKURU)」になってしまう。

うまい台詞とへたな台詞というのは、何もその芸の深さとか、キャリアの問題ではない、いわば、今お話ししている語り方の文法通りに話せるかどうかの問題なのです。たとえば「あした雨だから大阪にいく。」と、母音をぜんぶ続けて、子音も同様にしてしまうとうまく聞こえない。また、「大阪(ŌSAKA)」、というのは長音で、これを「おさか」といってはいけない。長音は長音としてのばさなくてはならない。さらに、連母音法則、連子音法則

と同様、異母音についても、異母音共鳴変化原則がございます。このような語り方の文法を、私どもが発見したわけですが、国語研究所の方でも当然研究されてると思っておりました。ところが、全然、なされていない。構造部門にはあれだけの国家予算をかけての研究が行なわれているのに、語ることの研究は行なわれていない。私としては、このような法則をきちんと、小学校の一年生の段階で教えてあげたい。そうすれば日本語は、みんなきれいに話せるようになります。

## 母音発声法の効用

私は劇団の研究所の生徒たちに、母音だけで台詞の練習をさせます。たとえば、「アプローズ」という芝居の冒頭の台詞で、「ありがとうございます。今夜は私にとって生涯最高の夜です。」というのがあります。これを、母音だけで語りますと、「アイアオウオアイア、オンアアアアイオッエ、イウアイアイオオオウエウ。」となり、母音だけですと不思議なことに腹筋でなければ動かないのです。どなたかが、英語は腹式呼吸法だと仰っていましたが、日本語は胸式呼吸法で閉めて喋ってしまう。けれどもまず、母音だけにして腹筋を使い、きれいな音を出した後は、子音をつけても美しい音が出ます。

また、なまりというものも、母音法で全部なおってしまいます。子音を入れると観念がからんでしまい、なおりにくい。アクセントがひどい地域というのは、ほとんどが平板語の地域なのです。私達標準語の耳で聞いていますと、うねっているように聞こえますが、それは相対的なもので、標準語の方がうねりがある。私はそれがわかった時に非常に楽だと思いました。曲がっている針金をのばすのは至難の技ですが、まっすぐなものにカーブを与えるというのはそんなに難しくない。針金でも言葉でも理屈は同じです。このことがわかって以来、アクセントの悪い人や、なまりのある人達をずい分なおしてきました。

一本調子でイントネーションがなく「ありがとうございます。」という役者に、「アイアオウオアイアウ。」と母音で言わせると自動的に音の高低に作用されてゆく。この母音だけで一幕の台詞を全部通しますのに8時間かかりましたが、役者が泣き出しましてね。そんな風だから私の稽古は猛稽古だと世間に評判が悪いのでしょうか。けれど8時間たってみると驚くほどきれいな標準語になっていました。たった8時間です。二幕は台詞の量が多いにもかかわらず、3時間でなおってしまった。耳が出来たということなのですね。地方から御出身の方で県人会の寮にいらっしゃると、なかなか、なまりは直りません。

それからどもりも同様で、観念と意識の動きがくいちがうとダメなものです。本当にこういうことは教科にとりあげていただいて、演劇学校で私達が訓練している人間に教職課程をとらせて各学校に配置して勉強させたいです



ね。でも、なかなか社会の常識がそういうふうには許してくれていない。

## 日本語をダメにしているもの

また、日本語をダメにしているという点で私は、NHKと国鉄をあげてみたい。言語というのは相手に伝達するためにあります。フランクに、心をつたえるために言語があるにもかかわらず、たくさんの人間とコミュニケーションするのは恐ろしい。そのために自閉的になって喋る。そうすると「ふし」がつくのです。学生時代よく神田駅を利用しましたが、毎朝、「かんだ～、かんだ～、おおりのかたは……。」と、何ともイヤな言葉で放送される。どんなやつが放送しているのかとのぞくと、18才ぐらいの男の子なのです。神田駅というのは5千人、1万人と乗降者がおり、その大群集に対して、「みなさん、神田でございます。」とフランクにコミュニケーションできないのですね。それでも大群集を相手にメッセージを伝えなければならないので、これはもう、「かんだ～、かんだ～。」という風に「ふし」をつけることによって、自分を守る事になってしまう。けれども、これを毎朝、毎夕聞かされたら、非常に耳が悪くなるわけです。ある時、国鉄のモニターを頼まれまして、悪口を言ってもしかたがないので、前に述べたこととお話し、もう少し、語りかけてはと申し上げたところ、「日本全国でやるのは大変なことです。」との返事でした。それも当然で、英語を話せる教師の方が、日本語をきちんと話す教師より多いのですから。標準語をきれいに話すのはなかなか難しいことなのです。ただ、新幹線だけは約束していただけて、できてみたら、なかなかフランクに聞こえてくる。これはいいと思ったら、なんとテープレコーダーがまわっているんです。やっとアナウンスにコミュニケーションがなりたってきたと思ったのですが。

それからNHKも良くない。ニュースというものは報道の客観性というものが、なんでも中立的に喋らなくてはならない。桜の花が咲いても、子供が自動車にひかれても同じ話し方をするわけです。私はやはり、桜の花が咲けばそこに喜びがあり、子供が路地でトラックにはねられたということは悲しみにみちた表現があるべきですし、人間生活というのは言語によってその様に伝わっていくものだと思います。NHKの話し方が、日本語の典型のように言われますが、あのまるで無精卵みたいな話し方はないですね。民放の古谷さんなどがお話になると、自分の故郷のなまりが入ったり、NHK型の純粹培養言語より、ニュースとその価値が伝わってきます。標準語は制定されてから、言語として我々が煮つめて、身につけるのにまだ非常に短い時間しかたっていないというところに原因の1つがあるのでしょう。

## 日本人“2ヶ国語”論

### ●デリケートな響き、艶のある方言

私が学生時代に、恩師の加藤道夫先生が、もし東北弁が標準語であれば、詩劇とオペラは、ずっと早くできたと言ったことがあります。確かに言語では、東北が非常に美しい。子供達の芝居を創作する時、東北の地方を設定します。東北弁は非常にデリケートな響きを持っている。50ぐらいの優美な言語の響きがある大言語圏だと思っているわけです。

京都弁も同様で、司馬遼太郎さんが書いてらっしゃいましたが、大阪弁では結婚の申し込みがやりやすい。ことわられてもひっこみのつくいい方法があるというのです。人間関係をこわさない、傷つけないのが、関西弁にはあると。それは、石山本願寺以後の何百年の言語の伝統、生活伝統があるからなのではないでしょうか。関西弁の成熟した言語にはつやというか、水あかみみたいなものがある。標準語にはこれがない。江戸弁というのは標準語とは違います。やはり、つやがあり、言外の意というものを沢山表現できる。

### ●機能的なだけの標準語

では一体、標準語というものを、何の目的で決めたのか。それは、当時、もっとも機能的な言語が必要だった。ことわられても、ひっこみがつく言い方というのは、言語が二重構造をもっているということなのです。つまりその曖昧さを持つては、日本の近代化が、きちんと軌道に乗れたかどうかということでしょう。おそらく、大久保利通という人は、日本は偉大な文化を持っているのだからと、外国からは機能と技術を入れる必要性しか認めていなかった。これが文化不急不要論となって明治維新はスタートした。ですから、言語を思い切って機能的な、論理性のあるものとして標準語を定め、その言語を基本にして近代文化の基を作っていくことになったわけです。

100年の間に、組織的、論理的、機能的な国家が出来上がった、ただ、その為、うっかり女性も口説けなくなったという状態です。つまり、つやの部分が失われてしまった。これは非常に大きな問題で、こういうことから若い人達の言語の頹廃につながっていくのではないのでしょうか。

### ●統一化の暴力

ベトナムの孤児が東北の山村に引きとられ、育ったという実際の話がありまして、これはおもしろい話だと思ひ、小さなミュージカルにした事があります。いろいろ不思議な設定を考えましてね、たとえば、なぜベトナムの子が日本にメッセージを送れたかという、風船に手紙をつけて飛ばしたことにする。東北の子供達が、手紙の結んである風船をみて、「なぬかゆすけてある。」と言うんです。そして、少女がやってきて初めて会った時、「ちょっくら、おしよしゅっちゃね。」と。「ゆすけてある」というのは「髪を結う」

の「結う」という意味で、我々が何でもガチッと「結びつける」のではなく、もう少し柔らかい響きを持っています。「おしよしゅ」というのも、「笑止千万」の「笑止」と書きます。これも、NHKのアクセント辞典をみますと、「恥」の意と書いてある。私は違うと思うのですね。自分が照れていることを客観的にみて「ちょっくら、おしよしゅちゃね。」と言う意識は、真っ赤になって恥ずかしいという意識のあり方とは違います。それを何でも「恥」の意に統一してしまうのが、近代国家の暴力というか、今の社会体制なのですね。そこで失われていくものは沢山あるわけです。

### ●最も前衛的な仕事とは

私は「ゆすけてある」とか、「おしよしゅ」という言葉が残っているべきだと思います。日本人2ヶ国語論だとよく言うのですが、私でしたら江戸弁と標準語というように、方言と標準語、つまり完全にネイティブラングが喋れた上で、標準語が使える。これが言語に対して敏感になることだと思っています。方言の中にある語感のつや、美しさを保ちながら、標準語を使いこむ。やはり、100年、200年と使いこんでいかなければできないと思います。ですから、私達は、現代使われている日本語を完全に語られて美しい言語に磨きあげ、方言の持つニュアンスをどのように標準語に生かすかを次の2千年代に、1つのメソッドとして渡していくのが、最も前衛的な仕事だと思っています。地下劇場でやるのが前衛ではなく、この言葉の艶を失った社会全体の歪みを是正し、次の世代にわたすことこそ一番の前衛の仕事だと思うのです。

## 美しい言葉を広げていくために

いろいろな努力をしながら、美しい言葉を広げていくために、文部省に働きかけております。もっと語り方の教育をするようにと。57年度の高校指導要領の中にやっと演劇という字が入りました。いままで、河原こじきだ、赤だという思想が我々を、中央官庁から遠ざけてまいりましたが、やっと文部省が演劇を要領の中に正式にとりあげたわけです。これは、語り言葉に対して教育界そのものの目が向くということなのです。

私はよくいろいろな会社を訪問いたしますが、秘書の方、交換手、受付、この人達の声なきききすと、大体、その会社の内容がわかりますというのは人間は意識が集中してリラックスしている時は、いい響きで喋っております。変に意識したり、別の意識が働くと喉をしめてしまう。無理なものを売りに来たセールスマンなど、閉めた声ですね。声一つで、企業がどのくらい無理しているか、人間関係が緊張しているかわかります。ですから言語教育というものに、学校でも、社会でももう少し目を向けなくてはなりません。言葉は空気のようなもので、無駄に使っていますが、空気がなくなったら大変なのと同様、汚れても大変です。ですから、私がこうやって無駄話をさせてい

ただいたことがお役に立てていただけて、それぞれの御環境の中で、言語に対する御注意を持っていただければ幸いです。

### 本田財団レポート

- |       |                               |        |
|-------|-------------------------------|--------|
| No. 1 | 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ローマ1977」の報告 | 昭53.5  |
|       | 電気通信大学教授 合田周平                 |        |
| No. 2 | 異文化間のコミュニケーションの問題をめぐって        | 昭53.6  |
|       | 東京大学教授 公文俊平                   |        |
| No. 3 | 生産の時代から交流の時代へ                 | 昭53.8  |
|       | 東京大学教授 木村尚三郎                  |        |
| No. 4 | 語り言葉としての日本語                   | 昭53.10 |
|       | 劇団四季主宰 浅利慶太                   |        |